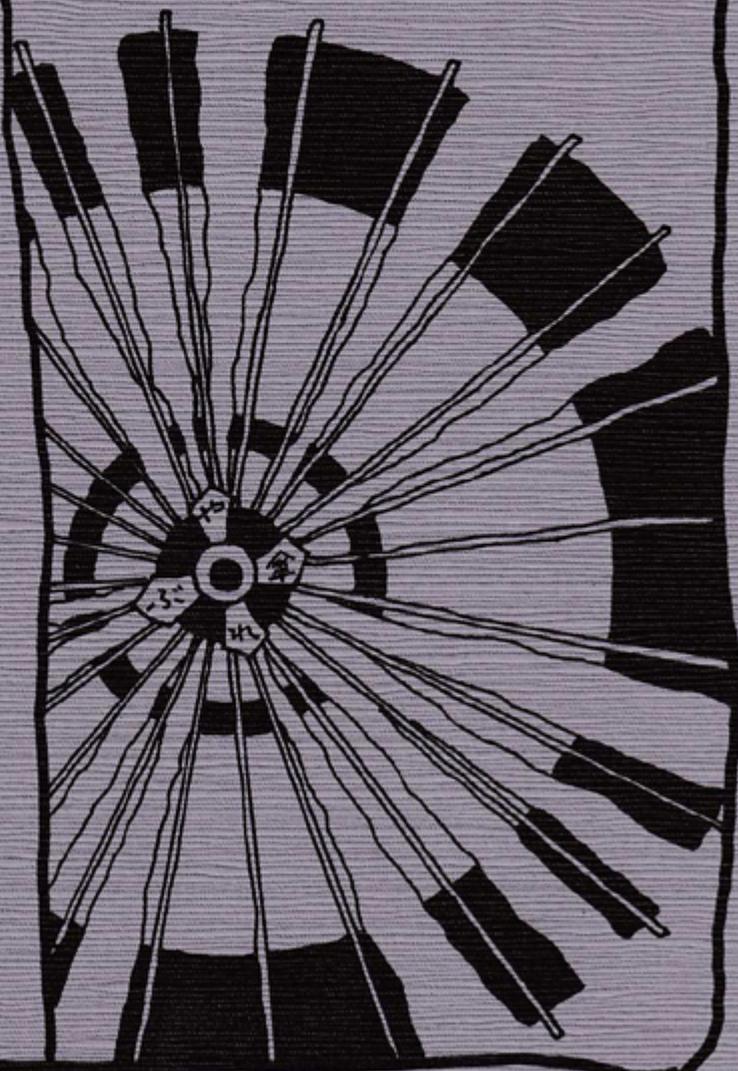


# やぶれ傘



一〇二号  
二〇一八年六月

まくなぎの向うの水のゆれてをり	根橋宏次
窓小さき家並み昼咲き月見草	大島英昭
老師見舞へば夏潮のこゑ近き	藤井美晴
まさをなる空に風あり花ミモザ	廣瀬雅男
チヨコミントアイスクリーム日雷	きくちきみえ
自転車が来たよとの声豆の花	丑久保 勲
奥津城へ続く石段落椿	瀬島洒望
本尊に向かひ右手に花御堂	渡邊孝彦
寝足りたる海辺の宿の浅蜷汁	安藤久美子
裏口のばたんと開く夏隣	小山唄枝
青嵐犬の抜け毛の飛んで行く	白石正躬
狭ければ背中あはせに花むしろ	青谷小枝
遮断機のパソコンと落ちし春の昼	天野美登里
水槽の水入れ替へる目借時	秋山信行
青芝に寝転んで見る万華鏡	有賀昌子

抄 集 句 傘 れ ぶ や  
選 夫 紀 崎 大

憲法記念日風に吹き飛ぶ日章旗	松村光典
縄電車降りる子のゐる花の下	上林富子
木村屋のあんばんを買ふ日の盛	倉澤節子
ガレージの高き天井燕の巢	佐藤稲子
ラリー続くテニスコートに散る桜	時田義勝
公園と青田一枚隣り合ふ	中島和子
春耕の人にバス停尋ねけり	萩原久代
診察台の小さな枕春の昼	広瀬 濟
花の寺仏足石に日のあたる	松本善一
どつと夏手足の長き女の子	武藤節子
席詰めて仲間とランチ豆の花	山本久枝
花吹雪寶頭盧様を隠しけり	浅嶋 肇
ランドセルに夢いつばいを入れる春	安齋正蔵
水筒の水ラッパ飲み夏来る	岩藤礼子
野良猫のまた母となる黄水仙	奥田温子

春の空廻航終へし明治丸  
 永き日の用事ひとつを加へたり  
 蝌蚪掬ひ孫等はしやげる三回忌  
 若やいで見せたき日あり夏隣  
 風光る女子生徒等の髪揺れて  
 八重桜パン売る店の人集り  
 母偲び夫思ひ出し鹿尾菜煮る

木村瑞枝

ラシナーの首すぢ赤く花は葉に  
 雲厚く八重山吹のゆれ通し  
 つかのまの薄日の中の犬ふぐり  
 アイロンが音立ててゐる春障子  
 駅前の花屋カーネーションだらけ  
 木村屋のあんぱんを買ふ日の盛  
 白シヤツの並ぶバス停椅子青し

倉澤節子

黒木東吾

ほろ酔ひて花散る道を往きにけり  
花を背にただ黙々と呑むばかり  
大半は花粉マスクの花巡り  
大楠の大方朽ちてなほ新芽  
仏壇の親父は肴生ビール  
薄れゆく古稀の決意や夏来る  
刺網をたぐる漁師や夏の雲

黒澤次郎

花屑の張り付いてゐる岸边かな  
散りきたる花を両手で受けにけり  
桜蕊降り境内にそよと風  
昨日より遠のく今日の雉の声  
春の風杭の辺りに魚群れて  
門前に海老根蘭おく山家かな  
木苺の花につられて行止り

小池一司

初燕商店街は賑はひて  
玄関に今年も守宮現はる  
白鷺の流れに曝す細き脚  
葛切や風の入りくる京の店  
蚊遣火のうすきけぶりの向かふ先  
早々に袋掛けされ塀の枇杷  
薔薇園の薔薇咲く遅速ありにけり

小巻若菜

校庭の声は空へと花満開  
夕桜思ひながけずに白き月  
曳航船は静かに沖へ桃の咲く  
高麗駅を降りてまづ逢ふ犬ふぐり  
蒲公英のまあるい綿毛つつきけり  
鯛焼屋の開店に列つばくらめ  
はやばやと暦をめくる夏隣

花満ちし城下に一打時の鐘  
波立てるびわ湖燕は低く飛び  
木香ばらのアーチくぐりて喫茶店  
新緑の光こぼる道を行き  
くれなゐの薔薇雨好きの友逝けり  
欄干を跳ねゆく鳥走り梅雨  
クレソンの繁る流れや日の暮るる

齋藤朋子

置き薬紙風船のおまけつき  
嫁ぎしを客に迎へて雛の膳  
古希を機に桜の下で再会す  
故郷の山河を讀へ卒業す  
朝な朝な空へ白増す辛夷かな  
父母は明治の生まれ紫木蓮  
三万本咲かせて名所チューリップ

佐々木あつ子

ガレージの高き天井燕の巢  
春曉に波の音聴く外湯かな  
春の夜の眉毛の如き月白し  
子等のため菖蒲湯立てる午後三時  
葉桜ととなりて静かな神田川  
草笛の聴こへ来るなり古城跡  
土産屋の新茶の試飲へと並び

佑藤 稲子

眞田 忠雄

春の雪放棄田にゐる群雀  
淡雪積むヘルン旧居に続く道  
児に教ふ小声でこれが初音よと  
放棄地を田に復したりげんげ祭  
風呂敷開け新茶を供ふ友の忌や  
師と散歩花菜明かりの利根堤  
城濠の水際 of 温み普門院

(普門院は松江城堀端にある)

辛子 和 へ 夕 餉 の 菜 の 春 め きて  
菜 の 花 の 黄 そ の ほ か の も の な に も な し  
出 嫌 ひ の ジ ャ ズ 聞 き に 行 く 春 の 宵  
「 い い ね 」 な ら 親 指 た て る 春 の 空  
柿 若 葉 マ リ ア の お 顔 隠 し け り  
昼 這 ふ 蟻 見 つ け た る ゆ ふ べ か な  
藤 棚 の あ た り ま で 飛 ぶ 竹 と ん ぼ

柴崎和男

盛 り な り あ た り 一 面 錨 草  
蚊 蜻 蛉 や 橋 ま で 続 く 木 屑 道  
子 供 の 日 赤 か ぶ の 種 貫 ひ う け  
飛 び 石 の 四 角 三 角 花 明 か り  
尺 蠖 の 屈 伸 続 く や ぶ の 中  
烏 の 子 「 路 肩 注 意 」 を ス レ ス レ に  
竹 牀 几 に 二 人 で 掛 け て 蕎 麦 を 待 つ

篠崎志津子

鈴木昌子

川端に屋台ののれん春ともし  
寒き春旅の芝居に雨宿り  
飛花落花流れの速し神田川  
朝桜日当る方へ漕ぎいだす  
江戸つ子の端くれ神輿かつぎ行く  
風のにる祭り太鼓の響きかな  
関伽桶にカーネーションを入れてゆく

高橋均

二浪して孫のやうやく入学す  
周りに野あり山あり百千鳥  
あしたこそ片づけようぞ春炬燵  
一斉に帽子飛ばして卒業す  
眼を洗ひ眼鏡を洗ふ花疲れ  
口スからの野球中継春の朝  
往来で歯科医に逢ひぬ春の宵

傘を打つ春雨の音に歩を止める  
旧道を抜ければ堤山霞  
囀りは木霊の如し眉山朝  
欄干の鴉と見合ひ遍路道  
臨月の腹幼子と並べ春  
足裏に床心地好き夏来る  
大小の背中向う春の海

竹内文夫

時田義勝

ウォーキングの列は長々木の芽道  
一斉に土筆伸びたる荒畑  
ラリ―続くテニスコートに散る桜  
田水張りて撒き散らすかに田螺出づ  
鯉の群激しく跳ねて葦若葉  
アンテナに止まり囀りぬたるかな  
岩に乗り日を浴びる亀春の川

中島和子

群咲いて茅花は風に吹かれをり  
人さがす防災無線春の昼  
公園と青田一枚隣り合ふ  
木洩れ日の射し込むところ目高浮く  
曲がりても茉莉花かをる夜の道  
青鷺が一步踏み出し雨兆す  
初夏の風にめくられる句帳かな

贄田俊之

新旧の引継ぎ済めり夜の桜  
豌豆を蒔きて菜園春仕舞ひ  
青空の奥へ奥へと花辛夷  
何処へ行く?どこでもいいよ春だもの  
代田から乾いた轍伸び夕陽  
胸元に吊してみたき露地苺  
ベランダに泳いでゐたる鯉幟